

平成22年国勢調査関係者会議（第6回：教育関係団体）議事概要

1 日 時 平成20年8月29日（金）13時30分～15時00分

2 場 所 総務省第2庁舎 6階特別会議室

3 出席者

教育関係団体：日本私立小学校連合会、全国高等学校長協会、全国都道府県教育委員会連合会

関係団体：全国統計教育研究協議会

関係行政機関：文部科学省

総務省：統計調査部長、国勢統計課長

4 議 題

(1) 平成22年国勢調査における協力及び広報について

(2) 平成22年国勢調査の集計内容のニーズ把握について

(3) その他

5 配布資料

資料1 平成22年国勢調査関係者会議における意見・提案と検討の方向

資料2-1 平成22年国勢調査第2次試験調査の概要及び調査票甲

資料2-2 従来の集計体系（平成12年国勢調査）

参考 人口でみる日本のすがた ～国勢調査の結果から～

6 議事の概要

(1) 平成22年国勢調査における協力及び広報について

資料1に基づき事務局から説明がなされ、また、全国統計教育研究協議会から当該協議会の概要や取組等について説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見等は次のとおり。

子供のころから統計について興味・関心を抱かせるのは良い考えである。統計グラフを見るだけでなく、子ども自身でグラフを作成・分析し、それをプレゼンテーションすることで興味を一層抱かせることができると思う。

P T A集会で社会科の教員から保護者に統計に関する資料を配布して説明することができれば効果的である。

小学校の場合、算数と社会は同一の教員が担当するので、ある事象について予想を立てさせ、方法を考えさせ（算数の分野）、どのように活用するのか（社会の分野）を身に付けることができる。授業参観で取り上げれば、授業参観の後に保護者会があるので、父母にも印象付けしやすい。

児童向けの冊子『統計を学ぼう』というタイトルは表現が固いので、例えば『統計で遊ぼう』という表現にしたり、統計という言葉を使わなくて

もよいのではないか。最終的に子どもたちに統計の大切さが伝わるようにすればよいと考える。

高校生については、統計を作成したことで終了ではなく、そこが出発点であり、その統計をどのように活かすかの方が重要になってくる。高校生の興味・関心を引き付けるには、意外性があることが重要である。高校生は統計があることは知っているが、それが必要という認識はほとんどないので、統計の必要性を訴えるためには、ショック療法も必要である。

教員に統計に関する興味・関心を持たせるためには、統計を教えることによって、その教員が担当する教科についても興味・関心が得られるということを示す必要がある。また、統計に精通していない教員でも、取り扱いやすい教材であれば、授業で取り上げやすくなる。

小中高校の中には、社会科教員が集まる研究会があるので、この場を活用することは有効である。

教職課程の大学生に統計の大切さを伝えることができれば、教育実習の際に、子どもにもそれを伝えることができるかもしれない。

統計に関する冊子を学校の副教材として使用することについてアプローチする場合、公立学校の場合は都道府県の教育委員会経由、私立学校の場合は各学校に対して行うということになる。

統計を普及するためには、各都道府県の統計主管課と教育委員会が連携して行う必要がある。

(2) 平成22年国勢調査の集計内容のニーズ把握について

資料2-1及び2-2に基づき事務局から説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見等は次のとおり。

市区町村別の人口ピラミッドがe-Statに掲載されていれば、統計に詳しくない人にも興味・関心を抱かせることができ、統計の普及につながるのではないかと。

子どもの生活に直結した身近な統計があれば、興味・関心を抱かせることができるので、市区町村別の数値やグラフを広く使用できるようにした方がよい。